

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市竊木町 198-3
電話 (043) 485-1801

シンポジウム----- 宮武 孝吉 日本文化に世界が注目----- 板井 省司
沢飛び石----- 徳武 寛 散歩----- 清澤 瞳子

中国の夢

太田 誠一

幕末日本は欧米列強から半未開国とみられ、開国を迫られ条約締結の交渉をせざるをえない状況にあった。

こうした中、日本が受身一方の不利な状況下で条約交渉が行われなかったことが近年の研究でわかってきた。

一つは外国人遊歩の範囲を七里以内に制限し、外国商人の国内侵入の防止を図り、外国人旅行権も十里以内と限定し外国人が産地に行けない規制をかけた。

当時地域経済が発達し、藩の交易を天保の改革でも規制できない位の状況であった。

また駕籠訴にあっても重罪、本人は獄門といわれてきたが条理が通れば、幕府はとりあげることが多く、訴人にあつても「急度叱」程度であった。

江戸期一揆は三千二百件といわれ、こうした処理で商品経済の発達を幕府官僚が知悉し、経験豊かな人材が生まれ、

条約交渉に役立った事も分ってきた。

明治維新より20年、30年余で日清、日露戦争を遂行する力を持つ背景には、商品経済の成熟が日本民族自立の基盤を培った。

一方英国等も直接占領するより開港させて港を使用する方を国策としていた為、日本の国内事情とも背景は似ていた。

隣国にあつて中国はアヘン戦争に敗れてから列強に圧迫を受け続け、逡巡する事長きに亘ったが、突如21世紀の今日中国四千年の歴史を彩って昇り龍の如く現れた瞬間でした。

高成長を続け乍ら、自国を世界に開放し資本蓄積を見事に果し、国民総生産に於いても日本を超越し世界一に向かって前進している。

中国がその力を背景に輝かしい歴史を踏まえた復興を夢

見ているとすると、120年前の日清戦争が思い起こされる。

長い歴史の中でわずか150年（アヘン戦争より第二次大戦）前の悪夢だとすれば隣国を只傍観するだけではすままい。

尖閣諸島問題が突如緊張した。中国漁船が日本の巡視船に体当たりしてきたことだ。この必死に現状を突破しようとする力は、猛烈な勢いで資本蓄積を行っている資本の論理と表裏一体といえるのではないか。

日本の明治維新のスローガンが富国強兵であったが21世紀に住んでいるにも拘らず18世紀の初期資本主義の姿を彷彿とさせる状況は、国力と軍事力が力を持つ時代に逆戻りしている事を頭している。

日本は明治維新という困難な状態を克服した経験をふまえ、この状況を解決する為、未来をいかに考え皆の力で創造する事が必要と思われま

(編集委員)

シンポジウム

佐倉地名研究会は昨年11月3日臼井公民館で、佐倉市民文化祭に参加して「佐倉の古い地名を語る」というシンポジウムを開催した。プロデューサーは伊藤清さんで、会場には資料展示もされた。基調報告では、野村忠男さんが「城砦に因む地名・根古屋について」、松平喜美代さんが「土浮、大佐倉、高崎の小字について」、山部紘さんが「びよう・尾余地名について」話をされた。詳しくよく調べておられ、面白かった。

デイスカッションは、私共司会をした。参加者から「地名は昔からあったという。狩猟採集時代には何十キロも歩いていたらしいから、地名は必要だった。後の時代に漢字を当てるようになって、あちこちに変な地名ができた」という発言があった。すると松平さんから「そうなんですよね。落ち葉のことを（かしや

つば）と言い、落葉樹のある場所の地名になっていた。後に漢字を当てて（柏葉・かしわば）となった。最近そこに橋が出来て振りがなが振ってあります。何と書いてあると思います？（はくようばし）と書いてある。（かしやつば）が（かしわば）になり、ついに（はくよう）になっちゃった。でも土地の人は、かしやつば、かしやつば、と呼んでいます」という話があった。

「鹿島」が付く地名はあるが、「鹿島村」という「村」があったのか、なかったのかについては議論が白熱した。稲葉の殿様は地名が好きだった、とか、昔は七つのお祝いにお子様を馬に乗せて佐倉から稲毛のお浅間様にお参りに行っていた、などの話もでて楽しかった。アンケートでも「内容が深く、大変面白かった」「熱の入った討論に思わず引き込まれました」と好評であった。

（上志津原 宮武 孝吉）

日本文化に 世界が注目

日本固有の文化が注目され、日本語が国際語として使われるようになってきた。

「もったいない」の意味は、「あるものの価値が十分に発揮されない」をたったの一言で表す。ゴミ問題に敏感な国際社会ではとても美しい言葉で重宝されていると聞く。

世界で一番普及しているのが「カラオケ」で、今では日本語だということを知っている外国人は少なくないくらいだ。

「和食」と同じように、日本の弁当が世界で注目されている。

今や「BENTO」は国際語だ。フランス語や英語の新語として辞書にのっている。特にフランスでは、芸術作品的な美しい弁当のコンクールまであるという。

今世紀に入り世界でも広ま

った日本語は「カワイイ（可愛い）」である。

ブロンドヘアの女性が日本人の黒髪がうらやましい、日本人の鼻がかっこいいといい、日本人はカワイイ民族という声もある。

アニメに続くファッションの世界でも、「カワイイ」日本は世界から注目されている。友達と会うと、まずお互いの持ち物、衣装などが可愛いかどうかチェックし合い、必ず褒める。

うちのおばあちゃんに、「おばあちゃん、カワイイね」というと喜ぶ。今や「カワイイ」は相手を心地よくさせる挨拶言葉でもあるようだ。あらゆるものを「カワイイ」とひとくくりにできるのは、日本人の度量の大きさなのかもしれない。

良好な人間関係を非常に重視する日本の女性特有の言葉である。

（ユーカーが丘 板井 省司）

沢飛び石

ちよつとずつ間をおいて休日の連なることを「飛び石連休」といいますが、飛び石連休の飛び石とは、本来、日本風の庭に設けられている歩行用の、少しずつ、飛ばして置かれていた敷石から、その名があるようです。

門から主屋に至るだけでなく、庭を巡るように設けられたり、池を渡って橋の代わりをしたりします。その場合は沢飛び石と呼ばれます。

亀山上皇の離宮だったのを禅寺に改めたのが京都の南禅寺ですが、この沢飛び石は有名です。しかし、京都まで行かなくても地元千葉県にも成田山新勝寺の成田山公園に立派な沢飛び石があります。滝から始まる水の流れは音もすがすがしく、いつ行っても美しい。池が三つありますが、池を渡ると、丸い石、角の石、濡れている石、乾いて

いる石などさまざまです。

生物の多様性が言われますが、「静物の多様性」を感じます。様々の石の形、姿が楽しい気分にくれます。成田山公園はどなたの作か存じませんが、南禅寺は小堀遠州の作と伝わっています。遠州は（1579～1647年）江戸時代の茶人・造園家。近江の国の人ですが豊臣氏・徳川氏に仕え、作事奉行・伏見奉行を勤めた後、遠江守であったので、遠州と称し、茶道を古田織部に学び、遠州流を創め、徳川家光の茶道師範、和歌、生花、建築、造園、茶具の選択、鑑定に秀でた人と言われています。

そこで、私からも、和歌一首を贈ります。

沢飛の刹那に変わる水の色
石の形に心躍らす

（上志津 徳武 寛）

散歩

今日も日課の夕散歩を、一時間程楽しむ。

開発を免れた台地の森は、冬枯れから桜色へ、そして樹木の頂き迄伸びている藤色へ、白色に見えているのは、エゴの木か。冠雪をしたかの様な真つ白い小花の群れ、緑の樹海とのコントラストが美しい。森の麓の野道は、八千代市との境道、足元にはいろいろの季節の草花が姿を見せている、この出会いが嬉しい。

毎日にぐんぐん成長し背丈の高くなったもの、地面に這う様にして咲くもの、その生態は様々だ。

カラスノエンドウ・スズメノカタビラ・ホトケノザ・イヌノフグリ・ハコベ・タンポポ・オオバコ・スマレなど。道端を埋めているのが、モイロヒルザキツキミソウ・ナカミヒナゲシなど。

なかでもスマレは、なつかしく可憐な花。

住宅地に入つてくると、家々の花壇や玄関先、ベランダを彩っているのが、サンシキスマレ、パンジーと呼ばれるスミレ。野生のスミレの改良で生まれ何千種もあるとか。

北ヨーロッパ原産。名はフランス語のパンセ（思索）に由来、下向きの蕾が人間の物思いにふける様に見えるとか。日本には江戸末期渡来、花の姿から遊蝶花、明治になつて三色スマレと呼ばれている。花径2～10センチのパンジー、

1～2センチのビオラ、共に表情豊か。特に小ぶりのビオラはミッキー達の集団のよう、眺める程愉快な仲間たちだ。

笑い、ほほえみ、怒り、ウインクやくしゃみをしたり、あごひげを伸ばしたり、と。

散歩の最後は、パンジー達のおしゃべりを楽しむ、表情豊かな花達は飽きない。

（井野 清澤 瞳子）

10月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043-485-1801

〒285-0025 佐倉市鐺木町198-3

URL http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

さくら道

今日14日は、鉄道の日です。明治5年のこの日にわが国初の鉄道が新橋・横浜間に開通したのを記念して制定されました。このとき、途中、品川、川崎、鶴見の3駅に停車して29^分の距離を走りましたが、所要時間は停車時間を含めて53分でした。

その後、日本全国に鉄道が敷かれるにもない鉄道唱歌が作られて歌われました。「汽笛一声新橋をはやわが

汽車は離れたり…」で始まる第一集の東海道編は66節からなる長編物でしたが、第二集の山陽・九州編から第五集の関西・参宮・南海編まで立て続けに発行され、合計で333節になりました。

作詞は大和田建樹、作曲は多梅稚^{おののちか}。モータリゼーションがくるまえの鉄道の良き時代だったと思います。

（金井 義彰）

あとがき

ゴーという音にふと頭を上げると、こぶしの木の先の青い空に飛行機が飛んでいくの目に入った。しばらく、その飛行機を目で追った。あんな大きな物体が空を飛んで行くなんてすごい。

その昔、空を飛んでみたいという憧れから始まり、ライト兄弟、リンドバーグを経て現在、世界中を飛行機で旅行できるようになったのは、多

くの人々の英知、努力のリレーがあつたからだ。

私も次の世代にバトンタッチできる何かに携わっているだろうか。ごく身の回りの、見過ごしてしまいがちな小さな事でも、鼻で笑われ一蹴されそうなる事でも、諦めないでリレーをしていくうちに大きなものになっていくのかも。

今編集委員四ヵ月。先輩方に支えていただいて、何かをリレーできるよう頑張りたい。

（林 千恵子）